

いわし雲

山角 正子

一、両親と共に

先日アルバムを整理していた折に、両親と三歳の私がテーブルを囲んで座っている写真を見つけてました。テーブルの上には、大版の聖書が乗っています。三人は、大きな口を開けて歌っています。毎朝、食事前にしていた家庭礼拝の一シーンです。父が聖書を読み、お祈りをし、みんなで『主の祈り』を合わせ、讃美歌を歌うのが日課でした。その写真は、幼い頃の生活を思い出させてくれました。時々自宅で家庭集会が行われ、近所の方々が部屋がいっぱいになったこと。クリスマスには子供たちがたくさん集い、にぎやかだったこと。

関西学院大学神学部を卒業し、牧師として名古屋で働いていた父は、或る牧師先生のお世話で、母と結婚しました。

母は一六歳の時に、両親、二人の妹と一緒に洗礼を受けています。すでに牧師として献身していた母の兄が、家族にキリストの福音を伝えたのです。

二人は、結婚式当日に初めて顔を合わせたそうです。両親は名古屋、恵那の教会に勤め、その後キリスト教を伝道するために内蒙古に渡りました。そして、一九四五年に、兄を連れて蒙古から引き揚げてきました。

帰国後、父は新しい導きを与えられて牧師の職を辞しました。しかし、両親は家族や周りの方々に、積極的に大胆に神様をお伝えしていました。貧しいけれど、家族揃って心を合わせて感謝をし、助け合い、分かち合いながらの生活でした。

中学二年生になる春休みに、父は脳溢血で倒れ、三日間の昏睡状態の後亡くなりました。「神様なんていらっしやらない！」と泣き叫ぶ私に、母は『私は裸で母の肢を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。』（ヨブ記一章二一節）を示し、蒙古からの引揚げ船の中で亡くなった兄について話してくれました。

兄は二歳の誕生日の前日に、麻疹のために亡くなりました。（私は兄に会ったことがありません。）悲しみの中で絶望的になった母を支えてくれたのが、そのみ言葉だったそうです。

父の死を通して、神様が支配される人間の命を実感しました。はかない、限りある命だからこそ、一日一日を、また周りの人たちとの触れ合いを大切に生きたいと思いました。

二、巢立ち

母は、病院の調理師として働きだしました。非常に忙しい仕事でしたが、全力で私を慈しみ、一人の人格として大切に扱ってくれました。

母と毎日の出来事や生き方を語り合い、励ましあいながら過ごしました。手先が器用な人で、旧制の女学校を卒業後、家政学校専攻科や洋裁専門学校で学びを重ねたそうです。主婦の友社の編み物の懸賞作品に応募し、銀賞を受賞したりもしました。本職の洋服仕立て屋さんには負けない出来栄えのスーツも作る腕前でした。器用さに感心すると、「こんなもの誰にでもできるよ」といつしゅうされました。「戦争を体験してみても、学問をつけておくことが一番の財産になることが分かったよ。学問は燃えてなくなることはないから、学問を身につけなさい」と折に触れて言う母でした。

中学、高校時代の私は、生まれ故郷新潟県上越地方を代表する山、妙高山を見ながら、カール ブッセの「山のあなたの空遠く幸い住むと人の言う・・・」を口ずさみ、未来に夢をはばたかせていました。

高校二年生になったばかりの春に、何気なくつけたラジオで【神戸】を紹介していました。ラジオを聴いていると、イメージがどんどん膨らみ出しました。青い大空の下に、六

甲山・摩耶山の緑が広がり、坂道を降りていくと海にたどり着く。街には外国人が行きかい異国情緒が漂う。自由な上品な雰囲気。外国語を学ぶのに最高の地……と、見知らぬ土地への想像は尽きません。以来、神戸という言葉を耳にするだけで、胸がどきどき。

そして、「神戸が私を呼んでいる」と進学先を、神戸市外国語大学に絞ったのです。母のお腹の中にいるときから通っていた高田教会の牧師夫人のお兄様が、神戸市外国語大学の学長をされていることにも、偶然でないものを感じたりもしました。高校三年生のクリスマス礼拝で受洗しました。受験や大人への巣立ちの不安が、受洗を決意する大きな動機になったように思えます。

母の寂しき、喪失感を思いながらも、自我を優先して志望大学へ進みました。

旅立つ前の晩に、母が「これが、娘との別れの始まり」と思ったそうです。けれど、明るい笑顔で「しつかり学問してね」と送り出してくれました。様々な喪失体験から今後のことに思いをめぐらし、自身の気持ちに封印をして、私の選択を尊んでくれた母に感謝するばかりです。

三、大学生活

大学は武庫山の裾野に位置していました。最寄り駅の阪急六甲から一〇分ほどなだらかな坂道を経て、地獄坂と呼ばれる急こう配の坂を五分ほど上ると、大学にたどり着きます。眼下に広がる光景は、街並みが長く続き、その先には太平洋がきらきら光っていて、まさに故郷新潟で想像していたものでした。

一年次は、午前中は語学の授業、午後はその他の学科の授業。毎日二時間の家庭学習が義務づけられていました。その決まりに従い、勉学に励むかわら、社会の出来事や哲学へと関心を広げました。社会の矛盾に抗する学生運動が盛んで、マルクスレーニン主義、唯物論片や、サルトルの実存主義を信奉する雰囲気があふれていました。(女子学生には、ボーボワールの人気が絶大でした。)

合理的に物事を判断し、神性が軽視される時代の傾向があり、徐々に自分の信仰に疑問を持ち出しました。「クリスチャンホームに生まれ育ったから、当たり前のこととして神様を受け入れていた。聖書に書かれていることを本当に信じているのだろうか」「神は人間が作り出した概念に過ぎないのではないか」と考え、教会から遠ざかるようになりました。

心惹かれる男性に出会ったのも、この頃です。背が高く手足の長い彼がテニスをしてい

る姿にときめきました。討論の場では、弁舌さわやかに論理的に語り、頭の回転の良さを感じさせました。明るく、ユーモラスな反面、孤独感、ニヒルさを漂わせていて、たった一学年上の人とは思えない大人の雰囲気を持っている彼には、私が幼く思えたようです。「君は純粋培養された人だね。子供の世界から、いきなり大学に滑り込んできたみたい。もっと自立しなければいけない。」

と指摘され、人格形成に大きな影響を受けました。

彼は、私の青春そのものでした。三年間付き合った彼でしたが、お互いの家庭の事情から結婚できないことが分かっていたので、卒業間際にお別れし、新潟に職を求めました。

大学に入学した時は、語学を生かして神戸の民間企業で働くつもりでした。しかし、電車の中で寂しそうにしているお年寄りの女性を見かけた時、「私が帰らなければ、母はこの女性のように寂しく暮らすのだろう」と胸が痛くなり、卒業後は新潟で教員をしようと決めたのです。

四、教員生活

佐渡の両津市立岩首中学校に新任英語教員として赴任しました。むせ返るばかりの若芽、薄ピンク色に煙る桜の花、透明な水色に広がる静かな海、そして純真で人なつこい生徒たちが迎えてくれました。全校生徒数七九名、教員七名の僻地二級の学校でした。

多くの子供たちは、高校を卒業すると同時に島外に出て行く佐渡。その日に備えて子供たちに確かな学力をつけようと、地域の方々や親御さんたちは熱心に教育に取り組んでおられました。子供たちも、期待に応える勉強ぶりでした。やりがいのある職場でした。でも、都会で暮らしている大学の友人たちのことを思うと、寂しさと焦りを感じました。高い丘の上に立つ中学校から日本海を眺めていると、一人取り残されているような孤独感に襲われることが何回もありました。教職は、自分には向いていないのではないかと思ったりもしました。

そのうち、両津市中心部にプロテスタントの教会があることを知り、通うようになりました。私以外に出席者はおらず、神学校を出たばかりの若い牧師先生と二人きりの礼拝でした。牧師先生は、いつも真剣に礼拝を捧げて下さいました。日曜学校の子供たちをとても慈しんで、楽しそうに接しておられるお姿も印象的でした。生かされている喜びに満ち、

明るく輝いておられる牧師先生を通して、神様からの語りかけ・招きを感じるようになりました。

二年後に佐渡から転勤し、ようやく母と一緒に暮らせるようになりました。

そして、夏休みに大阪万博に出かけた折の電車の中。心臓が止まるような出来事に遭遇しました。ぼったり大学時代の彼に出会ったのです！別れてからの空白の期間はまったくなかったかのように、二人はびったり歩み寄りました。

再会の四年後に、結婚へと導かれました。あれほど難しかった結婚が許されたことに、人知を超えるものを感じました。結婚式は、新潟県の日本基督教団高田教会で行われました。西宮に住む彼のご両親も、教え子たちも、参列してくれました。式の間中、知り合って九年目に結婚できたことへの感謝・奇跡に涙がとまりませんでした。

『神のなされることは、みなその時になんて美しい』

(伝道の書 三章一一節)

五、実りの時

娘二人が与えられ、夫と、母との五人家族の生活。三三歳の時、子安新田に家を新築し、それまで住んでいた母の家西城町四丁目から引越しました。長女二歳、次女が零歳の秋でした。娘たちと同年齢の子供がたくさん住んでいる新興住宅地でした。家族で旅行や温泉に泊りがけで行ったり、外食に行ったりすることは多くありました。が、良い家庭人ではなかったように思います。毎日、教材研究、学級日より、テストの採点、校務分掌の仕事などを、家に持ち帰っていました。生徒、学級のことがいとも頭から離れず、時には生徒指導のために、夜家を飛び出すこともありました。娘たちには寂しい思いをさせたり、細かい心配りができない母親でした。

いたらない私をカバーしてくれたのが、日曜学校と、夫と母です。娘たちの学校関係のことは、学習塾の仕事に携わっていて日中の時間の融通がきく夫がしてくれていました。夫はPTA役員としても大きな働きをしていました。母は、家事を担い、深い愛情で孫に接してくれました。日曜学校、夫の高潔さ、母の慈しみにより、娘たちは心豊かな人間に成長できました。

三三年間の教員生活で出会った生徒たちや学級、それぞれに懐かしく大切です。その中

で最も心に残っているのは、ある学級での一年間です。荒れた学級、しかも三年生を突然担任することになり非常に悩みました。が、生徒たちの悲しそうな、すねた目が心に深く突き刺さりました。とにかく生徒、保護者との結びつきや信頼を得ることが大切だと思いました。毎日学級だよりを発行し、保護者の方々にも順番で学級だよりに寄稿していただきました。昼休みは、教室で生徒たちと一緒に過ごしました。生徒が自身の能力に気づいてくれるよう努めました。毎日、様々な問題が起きて疲れ果てましたが、不思議と充実感がありました。ばらばらだった学級が、行事ごとに団結するようになりました。体育祭の学年対抗の大縄跳びで八学級中一位、合唱コンクールでも優秀賞を取りました。それともにも個々人の学力もどんどんついてきました。生徒の多くは、希望する進路に進めました。この学級での体験は、神様のお支えなしではできない奇跡的なことでした。荒れ果てた学級にいる生徒たち一人一人を生かすために、神様が微力な私を通して働きになったのか思えません。

合唱コンクールで歌った自由曲「思い出がいっぱい」は、今もみんなが集まる時には必ず歌われているようです。そして、今もSNSで彼らとつながり、クラス会にも招かれる幸いをいただいています。

六、海外体験

母が満州で生まれたからか、父母がキリスト教伝道のために蒙古に赴いたからか、外国にあこがれる気持ちをも、人一倍強く持っていました。長じて、外国語大学へ進みました。しかし、海外デビューのチャンスはなかなか訪れませんでした。

やっと、三五歳の時に教職員共済のツアーで、夏休みを利用してアメリカ西海岸・ハワイに行きました。楽しい八日間でしたが、観光でなく現地の人々や生活に溶け込みたいと思いました。

そんな願いが、名立中学校に赴任中にならうことになりました。名立町で中学生を海外派遣する事業が始まり、一回目・二回目のアメリカ研修に、生徒を引率したのです。各回十名の生徒が、カリフォルニア州にあるチノ市に二週間ホームステイしました。生徒は、午前中は語学学校で英語を学び、午後はボランティア、施設訪問、レクレーション、地元の子供たちとの交流などの活動。生徒がホストファミリーと過ごす土曜・日曜日は、一人で自由に過ごせ、千人も集う体育館の様な礼拝堂の教会の礼拝にも出席しました。

次の海外旅行は、娘たちと行ったオーストラリア。ツアーでなく、ガイドブックや現地の案内所で見学場所を決めました。ここでも、ゴールドコースト近くの教会の礼拝に出席

できました。その後、友人とハワイに。また、娘たちがシンガポールへの夫との旅をプレゼントしてくれたのも、嬉しいことでした。「国内の旅行が一番だ」と言い張っていた夫の海外デビューの旅でした。

最後にドイツ。私にとって最も親しい外国となった国です。次女の夫が駐在員として赴任した翌年二〇一一年七月一四日に、ドイツを初めて訪れました。夫が亡くなって二か月後のことです。次女たちはデュッセルドルフに住んでいました。大木が立ち並び、優しい、白い小さな花を咲かせている植物が芝のように敷き詰められている敷地内の庭には、リスや野ウサギがちよくちよく姿を現していました。近くの二つの教会から、一時間毎に時を告げる鐘の音が響いてきました。徒歩二十分のところにあるライン川はゆったりと悠久の時を刻んでいました。次女が所属していたデュッセルドルフ日本語教会の礼拝、家庭集会、行事にも参加させていただきました。三か月の滞在は慰め、癒し、前進の希望を与えてくれました。

二〇一七年四月一七日に次女たちが本帰国するまで、計六回、二二二日、ドイツを中心としてヨーロッパに滞在しました。親切で、個人の生活を大切にし、生きていることを大切にしているドイツの方々、ドイツが懐かしいです。

七、今この時

街中を歩いている時、洗濯物を干しながら空を見上げている時、六年近くも船橋市で過ごしていることが不思議に思えることがあります。大学生として神戸にいた四年間と、佐渡に教員として赴任した二年間以外は、生まれてからずっと上越（高田）市に住んでいたのですから。母を二〇〇五年一月二十日に、夫を二〇一一年五月一五日に天に送った後も、そのまま上越市に一人で暮らしていました。夫は亡くなる三年前に突然教会に通いだしました。礼拝や教会の方々とのお交わりを楽しみにし、真剣に信仰を求めていました。受洗前に亡くなったのが残念です。でも、教会のある姉妹が夫の愛唱讃美歌「見よ兄弟が」（讃美歌二一・一六二番）「主の食卓を囲み」（讃美歌二一・八一番）は、まさに夫の信仰告白だと言ってくださいました。

二〇一二年一月二七日に船橋市民となりました。長女夫婦が、船橋での同居を提案してくれました。世帯主として家を維持することの大変さや、独居の心細さ、寂しさを感じていたのが、大喜びでこちらに転居しました。「年を取ってから引越すると、認知症になる確率が高くなるそうだよ」「娘さん家族以外に知り合いのいないところに行つて、大丈夫なの」と心配してくれる友達もいました。でも、教会に連なっているので、どこに行つても親しい仲間に出会えるという確信があり、不安は全くありませんでした。日本基督

教団新津田沼教会に導かれ、豊かな信仰の養いをいただいています。たくさんの方々に温かいお交わりをいただき、自身にあった形で働かせていただけています。時には、身に余る役が回ってくることもあります。悩み感じつつも、「神様が必要とされているのだから」と感謝をもって受けさせていただいています。

一日一日顕著に成長し、命の輝きを放っている三人の孫たちの存在は大きな喜びを与えてくれます。その子たちに寄り添い、楽しみながら育んでいる賢明な二組の娘たち夫婦に脱帽です。敬虔な信仰を持ち慈しみ育ててくれた両親。人間愛に富み正義感に溢れた夫。優しく思慮深い二人の娘たちとその夫たち。言い尽くせない優しさや思いやりを家族からもらっています。それに反して私は自己中心的な、自己主張の強い人間です。イエスキリストが私たちに望まれる『愛』をわがものにするのを祈りつつ、進んでいきたいと思っています。

振り返ると、人生は長くもあり、短くもあっという間な感じがします。自分史を書きながら自己の歩みをあれこれ振り返りました。悔やんだり、懐かしさに立ち止まってしまい、書き進められない時が多くありました。でも、いつも神様が共にいてくださっていたことに気づかされ、書くことに再び向かうことができました。今後どんな人生が待っているのか不安もありますが、今を感謝し神様におゆだねして従いたいと願います。

愛唱聖句

*イザヤ書四十章三一節

主に望みをおく人は新たな力を得驚のように翼を張って上る。
走っても弱ることなく、歩いても疲れない。

*テサロニケの信徒への手紙一 五章一六―一八節

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。

*コリントの信徒への手紙一 一〇章一三節

神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはな
さらず、試練と共に、それに耐えられるよう、
逃れる道をも備えていてくださいます。

愛唱讃美歌

*讃美歌二一 三八八

主の恵み豊かなり

*讃美歌二一 五二二

キリストにはかえられません